

第IV章 調査成果のまとめ

第1節 旧石器時代について

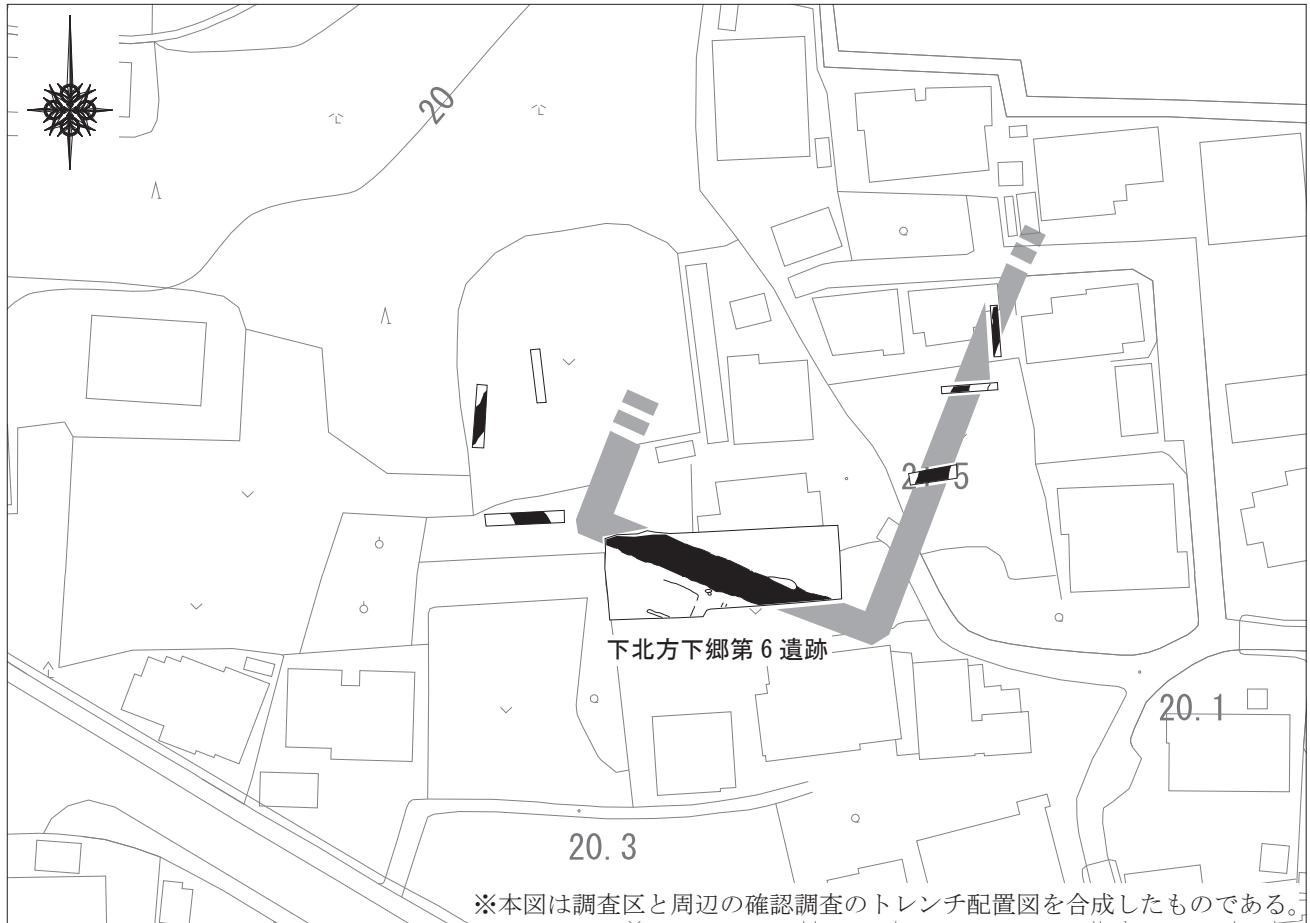
トレンチ1で検出された石器集中部では、角錐状石器、国府型ナイフ形石器を含む多数の接合資料が確認された。石材の分布は西側と東側のブロックで分かれるものの、垂直分布に差がみられないこと、ブロック間で相互に接合すること、石器の種類が類似すること等から、ほぼ同時期に形成された石器製作址と推測される。角錐状石器が小型であることや国府型ナイフ形石器を伴うといった特徴から、これらの石器群は宮崎平野部の第6段階に位置づけられる。接合資料には角錐状石器を作出するものと瀬戸内技法第2工程にかかるものがある。接合資料⑦は、同一の素材剥片から角錐状石器と瀬戸内技法第2工程による翼状剥片を作出しており、両者の同時性と近縁性が確認できる。また、山形打面の一辺に自然面のカーブを利用するものがあることや、打面調整の粗さが目立つといった、宮崎平野部の瀬戸内技法にみられる特徴を顕著に有した石器群といえる。

第2節 古墳時代前期について

溝状遺構14の掘削時期については、床面出土の土師器片の年代から古墳時代前期以降と推測される。ただし、小片であり流れ込みの可能性が否定できないため、詳細な時期については今後の検証を要する。中層に多量に廃棄された土師器群は、わずかに混入する弥生時代中期から終末期の土器小片を除けば概ね古墳時代前期末（VIIb期：河野2017）に位置づけられ、在来系とともに精製器種B群を含む布留式系、伝統的近畿第V様式系が混在する。また、中層からは土製の専用羽口280や被熱した敲石285と286が出土しており、鉄製品自体は出土していないものの、同時期に周辺で鉄器製作が行なわれていたことが確認できる。完全に埋没したのは、上層出土の土師器坏297が10世紀中葉から後葉に位置づけられることから、10世紀後葉から高原スコリア降灰前（13世紀）には完全に埋没したことがわかる。これらを総合すると、詳細な時期は不明だが古墳時代前期前半から後葉頃には溝が掘削され、その後0.5mほど埋まった古墳時代前期末に多量の土師器が廃棄された後放置され、自然堆積により埋没していったものと考えられる。

この溝状遺構14は直線的に延びており、その規模からも一定の空間を区画する意図をもった溝であると推測される。周辺の確認調査の状況をみると、溝状遺構14の北東付近に直線的に延びる規模の大きな溝状遺構が検出されており、溝状遺構14とほぼ直行する角度に延びている。トレンチ調査でありこれらが接続する確証はないが、今回の調査区が地形的に周辺で最も標高が高い位置にあることからも、方形区画を呈する可能性は十分に考えられる。

その他の遺構では、竪穴建物1の床面出土土器が溝状遺構14の中層出土土器とほぼ同時期に位置づけられる。今回調査地の西側に隣接する調査区（下北方下郷第5遺跡）でも、古墳前期後葉から末の土器が一定量出土していることから、溝状遺構14の南側を中心として、同時期の竪穴建物群が広がるものとみられる。



第65図 溝状遺構14の推定模式図 (S=1/1000)

【引用文献】

- 秋成雅博 2013「宮崎県における瀬戸内技法の様相」『九州旧石器』第17号 九州旧石器文化研究会
- 今塩屋毅行 2016「日向国における奈良時代の土器相～宮崎県宮ノ東遺跡の調査事例から～」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年研究』II 宮崎考古学会
- 河野裕次 2017「宮崎県の様相－宮崎平野南部を中心に－」『九州島における古式土師器』第19回九州前方後円墳研究会長崎大会 発表要旨集・基本資料集 同研究会
- 河野裕次・加賀純一 2018「宮崎県の様相－集落と古墳の動態について－」『集落と古墳の動態 I－弥生時代終末期～古墳時代前期－』第21回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表資料集 同研究会
- 久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』19 庄内式土器研究会
- 竹中克繁 2010「日向国における古代土器の変遷－宮崎平野部の須恵器・土師器編年－」『先史学・考古学論究V』下巻 龍田考古学会
- 堀田孝博 2012「宮崎平野部における平安時代の土器について－土師器供膳具を中心に－」『宮崎考古』第23号 日高正晴先生追悼記念号(上巻) 宮崎考古学会
- 宮崎市教育委員会 2016『下北方下郷第5遺跡』宮崎市文化財調査報告書第112集